トピックス３．マラバール漁民の「企業家精神」

Are Fishermen in Malabar entitled with Entrepreneurial Spirit?

写真画像

⑧ マラバール海岸漁村と木製カヌー
本文紹介の舞台となるコイロン市近郊の漁村

⑨ ケーララ漁民の伝統漁法（中国式）

画像出所

アジア経済研究所図書館
「開発途上国フォト・アーカイブス」、
「フォト・エッセイ：１９６０年のインド：「変化」の予兆を写す」
（田部昇：元アジア経済研究所理事・明治学院大学名誉教授）

説明

南インドのアラビア海に面した海岸線は最南端のケーララ州でその美の極限に達する。白い砂浜とバックウォーター、そしてマングローブの緑に映える数百キロメートルに及ぶ景観は人を魅了せずにはおかない、不思議な魔力がある。この地域は古く、西暦前からユダヤの民が迫害を逃れて定住の地としたところでもある。そして、聖フランシスコ・ザビエルのキリスト教伝来という、最も衝撃的な社会変容の歴史を経験している。遠く、アラビア海の西方から渡来する思想や文化、宗教をも自らのものに同化し続けた、このケーララの社会は今世紀に入り、いま、また「技術変化」という未曾有の挑戦を受けている。

時は１９６０年代初頭、コイロン市（Quilon）の北、６マイルに位置する二つの漁村、Sakthikulankara 村と Needakara 村がその舞台となる。FAO （国連食料農業機関）とノルウェー政府の支援を受け、漁業近代化計画がこの二つの寒村をパイロット地域として始まる。１９６０年代といえば開発至上主義、近代化主義にいささかの疑問を差し挟むことのない、楽観論に満ち溢れた時代であった。この漁業近代化計画はまず、在来型カヌーに改良型焼玉エンジンを装置し、沖合への航続距離を伸ばすという、「技術改良」へのアプローチをとった。ノルウェーの漁業技術専門家がまず直面した問題は、この改良という一見容易であろうと思われた、「在来と近代の接合」という技術上の問題を解決できなかった、という失敗である。もう一つの悲劇は漁民たちが新しい、外来的な技術文化に拒否反応を示し、ソッポを向いてしまった点である。ケーララ海岸の「美の回廊」と焼玉エンジンのカヌーでは絵にもならない。

私がこのプロジェクトを訪ねたのは、この開発主義の挫折ともいうべき教訓を本格的に調査しようと思い立った１９７０年の頃である。すでに１０年を経過したこのプロジェクトでは、ノルウェー人社会学者たちがこの漁村社会を対象に綿密な社会調査を進めており、なぜ漁民たちは拒否するのかを問い続けていた。＊ 二つの寒村の社会構成に観察と分析のメスをいれたのである。外来者の眼からは何一つ、その異同を識別できない二つの寒村は、マイノリティーのカトリック教徒、そしてアラヤ（ARAYA），ナイール（NAIR）,イラバ（IRAVA）など多数派カースト集団の混在地であること、その結果、ノルウェー人技術者の考案による外来技術文化にたいする対応にはそれぞれの宗教集団の間に微妙な違いのあることがわかる。

私は、このノルウェー人社会学者のフィールド・ワークを後追いする形で、この寒村に二週間近く滞在することになった。最も興味を引く問題は同じ「絶対的貧困」という生活状況の中で、また、同じ生活空間と社会生活を共有する二つのコミュニティー（社会集団）がなぜ、技術改良という外来的な要因に対して異なる反応を示すに至ったのか、という点である。
１９６０年代後半から、カトリック教徒漁民は在来の木製カヌーを捨て、新しいエンジン付き小型漁船を採用することになる。当然のことながら、生活水準が向上する結果となる。選択的な技術変化の受容が一群の少数コミュニティーの中で進む。しかし、一方では大多数のヒンドゥー教徒コミュニティーはこれを拒否し、静観の態度をとる。ここまではノルェー人学者の先行調査でも、また、私の現地調査でも識別ができている。事実確認から
要因分析にはさらに掘り下げた調査が必要となる。
この二つの寒村に旬日の生活を漁民と一緒に過ごしながら、調査仮説のイメージを考えた。

外来的変化に異なる対応―拒否と受容―を示す二つのコミュニティーには、進取の気性に富み、変化を受容する心的態度に優れた一群の人、(企業家精神 entrepreneurship)の持ち主、の存在があるに違いない。
――明らかに世界観とも言うべきアウトルックの異なる二つのコミュニティーにはその社会集団特有の生来的な「心的態度」が社会変化と密接不可分に絡み合って、発展と停滞の明暗を別けていくに違いない。
――したがって、この「心的態度」をキー概念として「動機調査」を進める。当時，学界が注目し始めた、D．C．マックレランドの研究手法を参考にする。(David C.MacClelland, The Achieving Society,Princeton,1961.

それから２０年を経過し、いま、アラビア海マラバール沿岸は近代漁法が成功を収め、大小の動力付漁船が日本市場向け、エビの漁獲でブームを呼んでいる。二つの寒村はいま、活気溢れる漁村に変わったという。私のマドラス基督教大学客員教授時代（１９７０年度）の教え子、今はバンガロール大学で教鞭をとるＧ君からの便りである。当時、大学院研究生として漁村のフィールド・ワークを手助けし、一緒に論文を書いた学究の徒、“２０年前の先生（私のこと）の仮説は訂正しなければなりませんね・・・”との追記がある。あらためて当時のフィールドノートを読む。調査の枠組みを作るべく「変化の主体」、「心的特質」、「資本主義のエートス」、「カルビニズムと西欧モデル」、「アントレプレナーシップの同義機能 (Equivalent Function)」などと気負いの書き込みがあった。

私は、思いもかけない「偏見」や「思い込み」を調査のなかに持ち込み、既定の結論を出そうとしていたのではないか。それは地域研究や開発研究の落とし穴であり、また、克服しなければならない挑戦でもある、と肝に銘じたものである。

出所

明治学院大学国際学部『付属研ニュ-ス』掲載のエッセイ「ケーララの漁民：地域研究の一つの挑戦」。若干の字句修正を加え、改題の上 WEB 転載した。

関連資料

A.M.Klausen, Kerala Fishermen and the Indo-Norwegian Pilot Project,Oslo,1968